社会の変化に対応し、未来を創り出すたくましい子どもの育成
～「学習の個性化」の充実を通して～

宇都宮大学共同教育学部附属中学校共同研究

Ⅰ　研究テーマ設定の趣旨

本附属学校園では、2019 年７月より本格的に幼・小・中・特別支援が連携し、「社会の変化に対応し、未来を創り出すたくましい子ども」を目指す子ども像と定め研究を進めている。具体的には各教科等の研究部会として、13 のプロジェクトを立ち上げ、12 年間の子どもの継続的な発達を視野に入れ、学びの道筋を設定して授業実践とその評価を進めている。

プロジェクトによる研究が行われる以前は、各校種がそれぞれに研究テーマを設け独自に研究を重ねてきた。本校では「共同研究」として、「思考を深める授業の創造」や「確かな学びを通じて自己を確立する生徒の育成」など、全教科の柱となる研究テーマを設け、各教科がそれを具体化した論を立て研究を進めてきた。2021 年７月からは「社会の変化に対応し、未来を創り出すたくましい子どもの育成　～１人１台端末を用いた実践を通して～」という研究テーマを設定し、本学校園が目指す子ども像と、そのために育成したい３つの力＜学びをつなげる力・かかわり合う力・やり遂げようとする力＞を視野に入れながら、１人１台の端末を用いた実践を通し、その手だての有効性を評価する研究を２年間行ってきた。

2023 年７月からの「共同研究」における新たなテーマ設定に向けて、本校の教職員にアンケート調査を行った（**図１**）。本アンケートは、本校の現状や生徒の姿を鑑みた際に、教職員が追究する必要性を感じている点について調査したものである。アンケート調査の結果を見ると、「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」、「主体的な学び」、「自己調整学習」といった回答が多かった。

図１　本校教職員へのアンケート結果

「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」については、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して　～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」（以下「令和３年答申」とする。）の中で「これからの学校においては、子供が『個別最適な学び』を進められるよう、教師が専門職としての知見を活用し、子供の実態に応じて、学習内容の確実な定着を図る観点や、その理解を深め、広げる学習を充実させる観点から、カリキュラム・マネジメントの充実・強化を図るとともに、これまで以上に子供の成長やつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められる。（中略）さらに、『個別最適な学び』が『孤立した学び』に陥らないよう、これまでも『日本型学校教育』において重視されてきた、探究的な学習や体験活動などを通

じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する『協働的な学び』を充実することも重要である。」とされている。さらに「個別最適な学び」については「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理されており、「指導の個別化」は「全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなど」、「学習の個性化」は「基礎的・基本的な知識・技能等や、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する」と記されている。

本校では過去に「コミュニケーションする力」や「協同」に着目した研究を行うなど、「協働的な学び」に関連した研究を行ってきた実績がある。現在も本校では授業中や諸活動の中で、級友や教職員などと積極的にかかわり合い、自らの考えを広げたり深めたりする生徒の姿が多く見られる。一方で、本校教職員が必要性を感じている「主体的な学び」や「自己調整学習」など「個別最適な学び」に関連する部分については、近年の研究においてあまり重点を置いてこなかったという課題もある。さらに、本校では生徒自身が「セルフコントロール」できるようになることをモットーとし、様々な活動に取り組んでいる実態がある。

これまでの本校の研究の成果と課題や本校の現状、生徒の実態などを踏まえ、本校共同研究では、「個別最適な学び」の中でも特に「学習の個性化」を充実させることが、より一層の「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」に繋がると考えた。そして「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」を図ることで、本学校園が目指す子ども像の実現や本学校園で育てたい資質・能力のよりよい育成を目指し、本研究テーマを設定し、授業実践及び分析を行うこととした。さらに、授業実践を重ねる中で「『学習の個性化』を促す手だてなどを模索し、その実践事例を発信することを通し研究成果を地域へと還元することも、本研究の大きな意義であると考えている。

Ⅱ　研究の目的

本研究は上記の研究テーマ設定の趣旨にもとづき、次の２点を目的として研究を進める。

① 本学校園が目指す子ども像に向かい、「学習の個性化」を充実させた実践を通し、育てたい３つの資質・能力の育成を図る。

② 「『学習の個性化』を促す手だて」などを模索し、実践等を地域へ発信する。

Ⅲ　研究の期間

・2023 年７月から 2026 年６月までの３年間とする。

Ⅳ　研究計画・研究方法

本研究は以下の研究計画・方法に基づいて研究を進めることとする。（順不同）

１年次

（１）アンケートを実施し、生徒の回答結果から育てたい３つの資質・能力の向上や「学習の個性化」の充実の状況について見取る工夫をする。

（２）校内授業研究会を２回開催し、それぞれ２教科、計４教科の授業提案を行う。

（３）群馬大学共同教育学部附属中学校との合同研修会の実施や共同研究全体会での研修などを通して、「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」などについての見識を深める。

（４）各教科で「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」と「『学習の個性化』を促す手だて」を想定し、それらを踏まえた実践を行うことで、検証を進める。

（５）実践などを本校のホームページに掲載することで地域への情報発信を図る。

２年次

（１）アンケートを実施し、生徒の変容から育てたい３つの資質・能力の向上や「学習の個性化」の充実の状況について見取る工夫をする。

（２）校内授業研究会を２回開催し、それぞれ２教科、計４教科の授業提案を行う。

（３）群馬大学共同教育学部附属中学校との合同研修会の実施や共同研究全体会での研修などを通して、「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」などについての見識をより深める。

（４）各教科での実践を通して、「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」と「『学習の個性化』を促す手だて」について、検証を進める。

（５）実践などを本校のホームページに掲載することで地域への情報発信を図る。

３年次（本年度）

（１）アンケートを実施し、生徒の変容から育てたい３つの資質・能力の向上や「学習の個性化」の充実の状況について見取る工夫をする。

（２）校内授業研究会を１回開催し、計２教科の授業提案を行う。

（３）群馬大学共同教育学部附属中学校との合同研修会の実施や共同研究全体会での研修などを通して、「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」などについての見識をより深める。

（４）各教科での実践を通して、「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」と「『学習の個性化』を促す手だて」について、検証を進める。

（５）「学習の個性化」の充実を図るために必要な要素について精査し、「『学習の

個性化』の充実を図る授業づくりのポイント」としてまとめる。

（６）実践事例や研究の成果などを本校のホームページに掲載することで地域への情報発信を図る。

Ⅴ　これまでの研究

本研究１、２年次の取り組みは下記の通りである。なお、その具体や成果などの詳細に関しては、『宇大附属中研究論集　第 72 集』および『宇大附属中研究論集　第 73 集』を参照いただきたい。

（１）　群馬大学共同教育学部附属中学校と合同研修会

群馬大学共同教育学部附属中学校と、互いの授業実践の共有や授業の在り方についての意見交換をする機会を教科ごとに設けた。両校の研究内容を鑑みて、「探究」、「学習の個性化」、「ＡＡＲサイクル」などを中心に情報の交流を図った。

（２）　校内研修

研究１年次の８月と 10 月に「学習の個性化」について見識を深めるための校内研修を行った。研修の内容は**表１**のとおりである。

表１

８月	①文部科学省や独立行政法人教職員支援機構で作成した動画を視聴する。 ②群馬大学共同教育学部附属中学校との合同研修会や①の動画視聴で感じたことや考えたことを踏まえ、「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」について、教科をこえて編成した4つのグループで意見交換する。 ③「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」を実現するために、どのような手だてが効果的か、またどのような授業を行ってみたいかについて意見交換する。 ④各グループで表出した考えを全体で共有する。
10 月	①8月の研修後に各教科で想定した「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」と「『学習の個性化』を促す手だて」について、各教科に共通する点や教科の特性が表れている点を中心に、教科をこえて編成した4つのグループで意見交換する。 ②各グループで表出した考えを全体で共有する。

これらの研修は、教科をこえたグループを編成し行った。教科をこえたグループでの意見交換が、「学習の個性化」の充実を図るために有効な手だてや授業の具体、期待する生徒の姿などについて考えを広げたり深めたりすることに有効に働き、その後の授業改善へと繋がった。

研究２年次の 10 月には、それまでの研究成果を踏まえ、「学習の個性化」の充実を図るために必要な要素について教科をこえて意見交換する場を設けた。本研修では「学習の個性化」の充実を図るために必要な要素を分類・整理することで、授業改善の観点を明確にすることができたと考える。本研修を通して見出した「学習の個性化」の充実を図るために必要な要素は下記のとおりである。

・課題設定	・土台となる資質・能力	・指導計画	・時間	・学びの自覚化
・協働	・環境	・多様性の尊重	・目標（ゴール）の設定	・教師のサポート

研究を推進する中でこれらの要素をさらに精査していくこととした。

同じく 10 月に一般社団法人こたえのない学校代表理事の藤原さと氏を本校に招き、授業観察後、「協働の中の個別化（個性化）、探究における個別の評価」という演題のもとご講話をいただいた。藤原氏から「学習の個性化」や「探究」に関する示唆に富んだ話を拝聴できたことは、本校共同研究における取り組みを省察する貴重な機会となった。

（３） 生徒へのアンケートの実施

生徒の変容から本学校園で育てたい３つの資質・能力の向上や「学習の個性化」の充実の状況を把握するための一助として、研究１、２年次ともに全校生徒へアンケート調査を実施した。３つの資質・能力に関する質問項目は本学校園研究主任会で、「学習の個性化」の充実に関する質問項目は、前述の校内研修で表出した考えをもとに本校共同研全体会でそれぞれ作成した（**図２**）。

研究１年次のアンケート調査の結果を見ると、多くの質問項目で肯定的回答が 90%以上であった。その中で、「私は課題を解決する際に、課題解決までの見通しを立てて課題を解決している。」（肯定的回答 82.2%）、「私は課題を解決する際に、課題解決の方法や進め方などについて点検し、調整しながら進めている。」（肯定的回答 86.9%）、「私は課題を解決する際に、課題解決までの自らの状況を振り返り、次に生かしている。」（肯定的回答 89.5%）の３つの項目に関して、他の項目と比較すると肯定的回答が少ないことが分かった。この３つの項目に関しては、どれも「自己調整力」に関する項目だという共通点がある。

附属学校園で育成したい3つの資質・能力について（4件法） よくしている　時々している　あまりしていない　していない

私は課題を解決する際に、

【学びをつなげる力】
○これまでに身につけた力や知識・技能を生かし関連付けて、課題を解決している。
○物事の関係やつながりを整理し、順序立てて考えている。
○必要に応じて適切に情報を得たり、情報を整理・比較したりしている。

【かかわり合う力】
○他者と交流することで、自分の考えを広げたり深めたりしている。
○自分の思いや考えを言葉や行動、絵や図などさまざまな手段で表し、他者にわかりやすく伝えている。
○他者の思いや考えを受け入れて、自分の考えの形成に役立てている。
○複数人で課題解決に臨むときには、コミュニケーションを図り、協力して課題を解決している。

【やり遂げようとする力】
○難解な課題であっても、解決しようと試行錯誤している。
○自ら進んで課題を解決している。
○課題解決までの見通しを立てて課題を解決している。
○課題解決の方法や進め方などについて点検し、調整しながら進めている。
○課題解決までの自らの状況を振り返り、次に生かしている。

「学習の個性化」の充実について（4件法） そう思う　やや思う　あまり思わない　思わない

各教科の授業には

★これまでの学習で身につけた力や知識・技能を生かし関連付けて、課題を解決する授業がある。
★自分の興味・関心に応じて、自ら学習課題を設定する授業がある。
★自ら情報を収集、整理・分析し、まとめ・表現する授業がある。
★課題解決の方法や学習の進め方などについて、自ら調整する授業がある。
★自らの学習の達成度やそこに向けた学習の進め方などについて振り返り、その後の学習に生かす授業がある。
★自ら評価基準（A・B・C）を設定し、学習に臨む授業がある。

図２　生徒への質問項目一覧

そこで研究２年次のアンケート調査の結果については、「自己調整力」に関する３つの項目に着目した。この３項目の研究１年次と研究２年次の回答結果を**表２**に示す。

表２

質問項目	年度	よくしている	時々している	あまりしていない	していない
私は課題を解決する際に、課題解決までの見通しを立てて課題を解決している。	R5	35.5%	46.7%	15.7%	2.1%
	R6	44.9%	38.9%	13.4%	2.9%
私は課題を解決する際に、課題解決の方法や進め方などについて点検し、調整しながら進めている。	R5	42.1%	44.8%	11%	2.1%
	R6	47.3%	39.4%	11.7%	1.7%
私は課題を解決する際に、課題解決までの自らの状況を振り返り、次に生かしている。	R5	48.3%	41.2%	8.8%	1.7%
	R6	52.7%	36%	9.5%	1.7%

研究１年次からの変容として、３項目とも「よくしている」の回答の割合が増加していた。つまり、「自己調整力」を習慣的・自覚的に働かせている生徒が増えていると考えられる。

さらに各教科の授業において「学習の個性化」の充実が図られているか見取るための質問項目について、各項目の研究２年次の肯定的回答の割合を**表３**に示す。

表３

質問項目	肯定的回答
各教科の授業には、これまでの学習で身につけた力や知識・技能を生かし関連付けて、課題を解決する授業がある。	97.3%
各教科の授業には、自分の興味・関心に応じて、自ら学習課題を設定する授業がある。	95.2%
各教科の授業には、自ら情報を収集、整理・分析し、まとめ・表現する授業がある。	97.6%
各教科の授業には、課題解決の方法や学習の進め方などについて、自ら調整する授業がある。	95.5%
各教科の授業には、自らの学習の達成度やそこに向けた学習の進め方などについて振り返り、その後の学習に生かす授業がある。	95.8%
各教科の授業には、自ら評価基準（A・B・Cの基準）を設定し、学習に臨む授業がある。	90.3%

どの項目に関しても、肯定的回答が 90%を超えていた。この結果から各教科で「学習の個性化」の充実を図った授業を実践しており、それを多くの生徒が実感していることが分かった。

これらの結果から、本研究を推進する中で「学習の個性化」の充実を意識した授業改善が各教科において図られており、それらの授業や取組が「自己調整力」を習慣的・自覚的に働かせる生徒の育成に繋がっているのではないかと考えた。本研究を推進していく中で今後も継続的にアンケート調査を行い、さらなる検証を進めていくこととした。

（４） 校内授業研究会

教科をこえた教職員グループを形成し、各教科で想定した「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」を踏まえて授業づくりや授業観察を行い、「『学習の個性化』を促す手だて」について教科横断的に検討・検証する場として、校内授業研究会を実施した。また、指導案や資料などに関しては本校ホームページに掲載し、研究の成果として発信することとしている。研究１年次に国語科、理科、社会科、音楽科、研究２年次に数学科、家庭科、道徳科、美術科が授業提案を行った。各教科の授業実践の概要などについては、本校のホームページを参照いただきたい。

（５） 「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」と「『学習の個性化』を促す手だて」の整理

前述した校内研修や授業実践の内容を踏まえて、各教科で想定した「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」と「『学習の個性化』を促す手だて」を整理・更新した。これらに関しては、引き続き授業実践及び検証を重ね、研究を推進していく中で更新していくこととした。

Ⅵ 本年度の研究

本年度は、前述の計画に沿って研究を進めた。ここでは、その具体や成果などについて述べていくことにする。

（１） 群馬大学共同教育学部附属中学校と合同研修会

本年度も群馬大学共同教育学部附属中学校と、互いの授業実践の共有や授業の在り方についての意見交換をする機会を教科ごとに設けた。今年度は「探究」、「学習の個性化」、「ＡＡＲサイクル」に加え、「自立した学習者」に焦点を当てて情報の交流を図った。

下記は合同研修会後の本校教職員の振り返りの一部である。

・「自立した学習者」について、探究を生徒がデザインすることや学習計画の見直しを意識して指導しているという点で、共通点を見いだすことができた。（社会科）

・「学習の個性化」「自立した学習者」のために、科学的事象から課題を見いだすことが非常に重要になってくる。郡大の実践から、「言葉じりにこだわらないこと」「教師の問いかけはシンプルであること」がポイントだという話があった。（理科）

・「探究」を進める上で、最初に立てる「問い」の設定が重要ではないか。「問い」を設定する上で、条件を付けることなどが考えられる。しかし、よりよい「問い」の条件はわかっても、はたしてその「問い」が条件にあてはまっているかを判別することが難しい場合もある。（群大では「本質的な問い」について探究させることに取り組んでいるが、そもそも「本質的な問い」がなんたるかについても、様々な考え方がありそうである。）また「AARサイクル」の中でも、特にReflection（振り返り）について。フィードバックが重要であるが、毎回個人に対して行うことは負担が大きい。本時の次の時間に全体で共有することや、カンファレンスの中で個別に行うことなどが考えられる。また全体で共有する際には、どのような振り返りが質が高いといえるか、観点を明確にする必要があるのではないか。（国語科）

・「疑問解決タイム」は、生徒が自ら問いを立て、振り返りを通じて学びを深める実践であり、問いの質を意識させる工夫が参考になった。
単元の導入からAARを意識し、「疑問解決タイム」にも組み込み、学習を循環的に捉える工夫が見られた。（数学科）

・道徳の授業ではAARサイクルを主体的に回すための手だてとして、授業を５つの段階（気付く・とらえる・深める・見つめる・あたためる）に分けて構想している点が印象に残りました。特に終末である「あたためる」は価値の余韻を残し、よりよく生きようとする態度を育むための手だてとして、映像や説話、同級生の実践紹介など多岐にわたる取り組みをしており、参考になりました。（道徳科）

（２）　校内研修

今年度も 10 月に校内研修を実施した。今年度は、これまでの研究成果を踏まえ、「『学習の個性化』の充実を図る授業づくりのポイント」をテーマに、意見交換と整理を行う場を設定した（**図３**）。本研修では、研究２年次に見出した「『学習の個性化』の充実を図るために必要な要素」を共通の観点とし、各教科の実践において見られた具体的な生徒の姿や授業の工夫と照らし合わせながら、授業づくりのポイントを整理していった。このように本校における実践を横断的に整理することで浮かび上がってきた「『学習の個性化』の充実を図る授業づくりのポイント」を、**表４**に示す。

図３　研修会の様子

表４

これまでに育成してきた資質・能力を活用して解決する課題を設定している。
生徒が興味・関心を抱いたり、必要感をもったりできる課題を設定している。
生徒がそれぞれ課題解決の方法や目標（ゴール）を想定できる課題を設定している。
課題解決の土台となる資質・能力が生徒に身についている。 （土台となる資質・能力を習得する段階を設けている。）
生徒が学習を調整しながら課題解決に取り組むための、十分な時間を確保している。
生徒が見通しをもって学習に取り組めるような工夫をしている。 （単元計画やルーブリックの共有など）
生徒が自分自身の学びを自覚できるようにするための工夫がされている。 （ＯＰＰＡやフィードバックの活用など）
生徒にとって適切で、必要性を感じるタイミングで協働の時間を取り入れている。 （また、生徒自身が協働を選択・活用できるようにしている。）
生徒それぞれの学びを実現するために必要な学習環境が整えられている。 （資料、ＩＣＴ機器、設備、教室環境など）
生徒間において、多様性を尊重する意識が醸成されている。
生徒一人一人に応じて、教師が指導・支援できるような工夫がされている。

なお、これらのポイントは、本校の実践を整理する中で見えてきたものであり、すべてを実施しなければ「学習の個性化」が充実しない、あるいは、すべてを実施すれば必ず「学習の個性化」が充実するというものではない。本校の実践を基盤としつつも、今後の授業

改善の中で、さらに多様な「『学習の個性化』の充実を図る授業づくりのポイント」が見出されていくものと考えている。

また、本研修は、「単元の桁」で授業づくりを構想することが、「学習の個性化」の充実を図る上で重要であることを、改めて共有・再認識する機会となった。

（３） 生徒へのアンケートの実施

研究１・２年次に引き続き、本年度も全校生徒へアンケート調査を実施した。なお質問項目に関しては、**図２**を参照されたい。

本分析では、令和５年度（研究１年次）および令和７年度（研究３年次）に実施した「研究に関するアンケート」の結果を用い、附属学校園で育成したい資質・能力に関する項目（質問１～12）と、「学習の個性化」の充実に関する項目（質問 13～18）との関連を明らかにすることを目的とした。具体的には、まず各項目の年度間の変化を把握した上で、次に項目間の関連性について相関分析およびクロス集計を行った。特に本研究との関連が深い質問 13～18 に着目し、分析を進めた。**表５**および**表６**は、それぞれ質問１～12、質問 13～18 における年度間の平均値の変化を示したものである。なお、調査は４件法で実施し、数値が高いほど肯定的な回答を示している。

表５

質問	内容（要約）	令和５年度	令和７年度
質問 1	知識・技能を関連付ける	3.57	3.58
質問 2	関係やつながりを整理して考える	3.41	3.44
質問 3	情報の収集・整理・比較	3.55	3.63
質問 4	他者との交流による思考の深化	3.52	3.60
質問 5	多様な手段での表現	3.29	3.37
質問 6	他者の考えを取り入れる	3.55	3.56
質問 7	協働	3.56	3.63
質問 8	試行錯誤する姿勢	3.45	3.50
質問 9	主体性	3.40	3.41
質問 10	見通しをもつ	3.15	3.20
質問 11	学習の点検・調整	3.27	3.28
質問 12	振り返りと次への活用	3.36	3.37

表６

質問	内容（要約）	令和５年度	令和７年度
質問 13	知識・技能を関連付けた課題解決する授業	3.59	3.67
質問 14	興味・関心に応じた課題設定をする授業	3.51	3.62
質問 15	情報収集・整理・表現する授業	3.68	3.71
質問 16	学習の進め方の調整をする授業	3.55	3.61
質問 17	振り返りを生かす授業	3.54	3.62
質問 18	評価基準を設定する授業	3.37	3.41

単純集計の結果、令和７年度は令和５年度と比較して、質問 13〜18 の平均値が全体的に上昇する傾向が見られた。これは、授業において「学習の個性化」の充実を意識した取組が、継続的かつ体系的に行われるようになってきたことを示唆している。一方、質問１〜12 については、年度間の数値変動が比較的小さく、いずれも高い水準を維持していることから、学習者の学びに対する姿勢が安定的に形成されている状況がうかがえる。

次に、令和７年度の質問 13〜18 における項目間の関連性を検討するため、相関分析を行った。**表７**はその結果を示したものである。分析結果から質問 13〜18 の各項目間には中程度の正の相関が認められた。このことから、「学習の個性化」に関わる各要素は個別に機能しているのではなく、相互に関連し合いながら一体的に作用している可能性が示された。

表７

	Q13	Q14	Q15	Q16	Q17	Q18
Q13	1.00	0.55	0.55	0.51	0.48	0.36
Q14	0.55	1.00	0.58	0.60	0.55	0.41
Q15	0.55	0.58	1.00	0.54	0.54	0.43
Q16	0.51	0.60	0.54	1.00	0.64	0.47
Q17	0.48	0.55	0.54	0.64	1.00	0.49
Q18	0.36	0.41	0.43	0.47	0.49	1.00

そこで、こうした関連の具体的な様相を把握するため、いくつかの項目についてクロス集計による分析を行った。まず、学習者自身の振り返りに関する質問 12 と、授業における振り返りの実施状況に関する質問 17 との関係についてクロス集計を行った（**表８**）。その結果、質問 17 の評価が高い群ほど、質問 12 においても肯定的な回答を示す割合が高い傾向が確認された。具体的には、授業において振り返りの機会が「十分にある」「どちらかといえばある」と回答した学習者の多くが、自身の学習を振り返る行動についても高

表８

Q17＼Q12	1	2	3	4
1	66.7	0.0	0.0	33.3
2	17.6	29.4	29.4	23.5
3	1.7	14.7	61.2	22.4
4	0.7	3.2	34.6	61.4

く評価しており、両項目の評価が同時に高まる構造が見られた。一方、授業での振り返りが十分に行われていないと感じている学習者では、自己の振り返りに対する評価も相対的に低い傾向が示された。

さらに、授業における学習の進め方の調整に関する質問 16 と、学習の点検・調整に関する質問 11 との関係についても同様に分析を行った（**表９**）。質問 16 の評価が高くなるにつれて、質問 11 における肯定的回答（**3**・**4**）の割合が段階的に増加していることが分かる。特に、質問 16 で最も高い評価を示した群では、質問 11 の「**4**」が 53.4%を占めており、授業の在り方を肯定的に捉えている学習者ほど、自身の学習を点検・調整しながら学習している割合が高いことが示唆される。一方、質問 16 の評価が低い群では、質問 11 における低位の回答が多く、授業の在り方と学習者の意識との間に一貫した関連が認められた。

表９

Q16＼Q11	1	2	3	4
1	75.0	25.0	0.0	0.0
2	0.0	26.3	47.4	26.3
3	0.9	16.1	63.4	19.6
4	0.4	8.9	37.4	53.4

以上の分析結果から、学習者の意識に関する項目と授業の在り方に関する項目は、それぞれ独立して機能する要因ではなく、相互に関連しながら同時に高まっていく関係にあると考えられる。特に授業において、学習を振り返り、学習の進め方を点検・調整する場面が計画的に位置付けられている場合、学習者が自身の学習過程を捉え直し、次の学びへとつなげようとする意識が高まる傾向が確認された。このことは、「学習の個性化」を志向した授業づくりにおいて、単元や授業の終末における振り返りの質と量を保障することが、学習者の主体的な学びを支える重要な要素であることを示している。

ただし、本研究は質問紙調査に基づく相関分析であり、因果関係を直接的に示すものではない。今後は、授業実践の質的分析や継続的な調査を通して、より多角的な視点から検証を進めていく必要がある。

（４） 校内授業研究会

前述のねらいをもって、本年度は１月に外国語科と保健体育科が授業提案を行った。各教科の授業実践の概要については、本校のホームページを参照いただきたい。

ここでは、保健体育科が提案した授業を踏まえ、「学習の個性化」を充実させるために「単元の桁」で授業を構想することの重要性について考察する。

本実践では、単元の前半において心身の発達や心の健康に関する原理・概念、基礎的な知識を段階的に整理しながら学習し、後半においてそれらを個人生活と関連付けて活用・探究するという単元構成が意図的に設定されていた。この構成により、生徒は各時間で学んだ内容を単発的な知識として捉えるのではなく、心と体の相互関係や発達段階に応じた変化として関連付けながら理解する姿を見せていた。

とりわけ有効であったのは、第５時を既習内容と個人の生活経験とをつなぐ「ハブ」と

して位置付け、単元構想上の要とした点である（**図４**）。第５時では、これまでに学習した原理・概念や知識を基に、「自分の生活ではどのような場面が当てはまるか」「自分の心や体にはどのような変化が起きているか」といった問いを通して、自身の生活と関連付けて捉え直す時間が設定された。その結果、生徒は学習内容を自分事として捉えようとする姿を示していた。

また、この時間を設けたことで、生徒の課題意識が明確化された点も重要である。生徒は自らの心身の状態やストレスの在り方に気付き、「自分にはどのような対処が必要か」「自分に合った方法は何か」といった問いを自然に抱くようになっていた。こうした課題意識は、第６時におけるストレスへの対処方法を探究する学習へと円滑につながり、探究の出発点として機能していた。

第６時では、第５時での気付きや振り返りを踏まえ、生徒一人一人が自分の生活や経験に基づいて課題を設定し、主体的に解決を図ろうとする姿が見られた。第５時を知識と個人生活をつなぐ時間として位置付けたことは、第６時における思考の深まりや主体的な学習態度を支える基盤となっていたといえるだろう。

このように、単元全体を見通して授業を構想することで、各時間の学習が断片的な知識理解にとどまることなく、生徒一人一人の必要感に基づいた課題意識の形成へとつながっていた。以上のことから、「単元の桁」で授業を構想することは、生徒が学びをつなげ、個人差を前提とした探究へと進むための基盤を形成するものであり、『学習の個性化』を充実させる上で重要であると考えられる。

図４　本単元の構成

（５）「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」と「『学習の個性化』を促す手だて」の精査

これまでの研修や授業実践を踏まえ、各教科において想定してきた「『学習の個性化』を充実することで期待する生徒の姿」と、それを実現するための「『学習の個性化』を促す手だて」について精査を行った。その結果、これまでの研究成果を基に各教科で整理・精選した内容を、**表 10** として一覧にまとめて掲載する。

表 10

	「学習の個性化」を充実することで期待する生徒の姿	「学習の個性化」を促す手だて
国語	これまでの学習で身につけた力や知識・技能を関連付けて課題を解決する姿	・課題を解決するための力や知識・技能の蓄積 ・課題を設定するための視点の蓄積 ・題材及び課題設定の工夫 ・課題解決時における自らの理想像を明確にする場面の設定 ・学習履歴の蓄積と活用 ・1枚ポートフォリオ（振り返り）の活用 ・自らの学びを振り返り、調整することのできる場面の設定 ・ルーブリックの共有と活用
	批判的思考を働かせ、自ら課題を設定する姿	
	必要な情報を自ら収集、整理・分析し、まとめ・表現する姿	
	見通しをもって学習に取り組み、課題解決の方法や学習の進め方などを自ら調整する姿	
	学習の達成度や進め方、身につけた力や知識・技能などについて振り返り、その後の学習に生かす姿	
社会	学習課題に対して、適切な情報を収集し、必要な情報を選択・判断して活用する姿	・複数の資料を関連付けたり、適切に情報を収集したりして、選択・判断できる技能の習得 ・社会的な見方・考え方を働かせながら既習の知識を活用し、追究できるような学習課題の設定 ・学習の見通しをもたせるとともに、学びの過程を振り返り、学習内容を調整できるような単元の学習シートの活用
	これまでに学んだことを基に、新たな疑問や問いを立てることで解決を目指そうとする姿	
	社会的事象を基に、課題を見出し、社会的な見方・考え方を働かせながら学習計画を立案し、修正をしながら解決を目指す姿	
数学	個に応じた知識・技能を高めようとする姿	・振り返りやレポート ・探究の方向性の助言 ・ふさわしい課題の提示
	数学を日常場面へ活用しようとする姿	
	定理について探究しようとする姿	
	様々な考えを互いに尊重しあう姿	
理科	身近な自然現象に対して疑問を持ち、自ら課題を設定できる姿	・課題を設定させるための効果的な自然現象を提示する ・単元の終わりなどに、既習事項をベースとした発展的課題を設定させる ・生徒の活動の場を広げるために、学習空間や学習時間を設定させる
	自らの力で仮説を設定できる姿	
	課題解決の方法を自ら立案できる姿	
音楽	音楽的な見方・考え方が身に付き、自分に合った見方・考え方を活用する姿	・課題設定やゴールの例を教師が提示し、道筋を明確する ・課題を見つけるための方法や視点を提示し、選択させながら学習を進める ・生徒同士でアドバイスし合い、学習を深めるために基礎的な知識や技能の定着を図る
	生徒の興味関心の幅が広がり、多様な音楽への興味が深まる姿	
美術	造形的な見方・考え方を働かせながら、これまでに学んだことを活かして楽しみながら創造活動に取り組む姿	・実生活において必要性を感じられる題材設定 ・情報量の多い資料（実物や高解像度資料） ・経験化したこれまでの学びが活用できる課題設定 ・自由度のある主題設定 ・学びの道筋が見える1枚ポートフォリオの活用 ・情報の収集や吟味（ICT活用） ・容易に修正できるアイディアスケッチ（ICT活用） ・自発的な課題設定を促す発問の工夫 ・「試み」が行える環境設定 ・活動時間の確保
	造形的な視点をもち、対象や事象に対して自分としての意味や価値を作り出したり、交流の中で新しい価値観を見出したりしながら、主体的に創造活動に取り組む姿	
技術・家庭	授業で身につけた知識と技能を、生活の中で活用しようとする姿	・授業で学習したことを家庭で生かせる課題の提示 ・自分や家族の生活と結びつけて考えられる場や課題の設定 ・身の回りの問題を発見し、解決していけるような題材の設定 ・家庭での実践を評価、改善していけるような課題の設定
	自分や家庭生活を振り返って課題を見出し、適する方法で解決しようとしている姿	
	学びを通して、自分の思いを具体的に構想し、よりよい生活にしていこうとする姿	
	実践したことを振り返り、評価し、よりよい生活になるよう改善しようとする姿	
保体	生徒が知識・技能の習得に必要感をもって課題解決に向かう姿	・実技においては、ゲームなどの実践から基本動作を確認する流れを意識した授業の展開 ・技能を提示してから、自分なりの解釈をする時間を設ける ・学習内容と自分を比較する場の設定や発問の工夫 ・新しい視点を見つけ、物事を多面的に捉えられる題材設定の工夫 ・知識・技能の活用を意識した時間の設定 ・「学びをつなげる力」、「かかわり合う力」、「やり遂げようとする力」を関連させる授業の展開
	個に応じた知識・技能を身に付け、授業中に発揮する姿	
	知識・技能を高めるために、自ら適切な課題設定をする姿	
	授業で学んだ知識・技能を、自分の身体や生活に当てはめて考えを深める姿	
英語	これまでの学習で身につけた知識・技能を活かして意欲的にコミュニケーション活動に取り組む姿	・身につけた知識・技能を活かせるようなタスクの設定 ・発展的な教材の開発 ・生徒へのフィードバックの充実 ・ICTの効果的な活用 ・ふり返り活動の充実 ・単元の評価基準を教師と生徒が協働で作成する機会の設定
	自己の関心や必要に応じて情報を探究しようとする姿	
	自己の興味、関心に従ってテーマを設定し、パフォーマンス活動に意欲的に取り組もうとする姿	
	自己の活動をふり返り、分析し、次の活動に向けて改善しようとする姿	
	自らが設定した評価基準に照らし合わせ、自分や級友の活動を改善しようとする姿	
道徳	これまでの自分の生き方や各教科等における学習の成果を基に、よりよい生き方について広い視野から多面的・多角的に考えている姿	・道徳的価値を多面的・多角的に捉え直す教材、学習課題の設定 ・自己の生き方や価値観に基づき、教材に描かれている道徳的価値を見出す活動（道徳読み）の導入 ・協働的な学習の機会と振り返りの位置付け
	子ども一人一人が自己の価値観を見つめ、教材に描かれた事象について、自らが納得できる考えを導き出そうとする姿	
	道徳的諸問題に対し、自分事としてとらえたことをこれからの生き方に生かしていこうとする姿	

Ⅵ　研究の成果と課題

本研究では、「学習の個性化」の充実に焦点を当てた授業実践および校内研修を３年間継続してきた。その結果、授業づくりと学習者の学び方の両面において、一定の成果が確認された。

第一に、授業における「学習の個性化」の充実を意識した取組が、各教科において継続的かつ体系的に行われるようになってきた点である。アンケート調査の結果からは、質問 13～18 に示される「学習の個性化」に関する項目の平均値が年度を追って上昇しており、生徒自身が授業の中でその充実を実感していることがうかがえる。特に、課題設定、学習の進め方の調整、振り返りを生かす学習といった要素について、肯定的に捉える生徒が増加している点は、本研究の大きな成果である。

第二に、「学習の個性化」に関わる授業の在り方と、学習者の意識や学び方との間に、相互に関連しながら高まっていく関係が見られた点である。相関分析およびクロス集計の結果から、授業において振り返りや学習の調整が意図的に位置付けられている場合、学習者自身も学習過程を振り返り、次の学びに生かそうとする意識を高めている傾向が確認された。これは、授業改善が学習者の内面的な学習行動に影響を及ぼし始めていることを示唆するものであり、「学習の個性化」の充実を志向した授業づくりの有効性を裏付ける結果であると考える。

第三に、校内研修や校内授業研究会を通して、「学習の個性化」を授業づくりの共通言語として捉える視点が、教職員間に広がってきた点である。特に「単元の桁」で授業を構想することの重要性が共有され、単元全体を見通した学習設計が、生徒一人一人の必要感や課題意識を生み出し、「学習の個性化」の充実へとつながることが具体的な実践を通して確認された。これらの成果は、本校における授業改善の方向性を明確にするとともに、学校全体としての研究の蓄積となっている。

一方で、本研究を通していくつかの課題も明らかになった。

第一に、学習者の変容については、質問紙調査によって一定の傾向を捉えることができたものの、授業改善との因果関係を直接的に示すには至っていない点である。今後は、授業中の学習過程や成果物、振り返りの記述などを分析するなど、質的な視点も取り入れ、「学習の個性化」が学習者にどのような影響を与えているのかを、より多角的に検証していくことが求められる。

第二に、「学習の個性化」を支える評価の在り方について、さらなる検討が必要である。学習者が自ら設定した課題やねらいに対して、どのように評価を行い、次の学びへとつなげていくのかについて、授業実践と評価を一体的に捉えた研究を進めていく必要がある。

本研究を通して、「学習の個性化」の充実は個々の授業の工夫にとどまるものではなく、単元構想、評価、学習環境、教師の関わりなどが相互に関係し合う中で成立するものであることが明らかとなった。今後は、本研究で得られた成果と課題を踏まえながら、実践の質を高めるとともに、その成果を引き続き地域や社会へと発信し、共有していくことが求められる。

今後も、「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」を目指し、「学習の個性化」を軸とした授業改善を重ねることで、本学校園が目指す「社会の変化に対応し、未来を創り出すたくましい子ども」のよりよい育成へとつなげていきたい。

【主な引用・参考文献】

・宇都宮大学共同教育学部附属学校園：『連携研究プロジェクト研究概要集』，2025.

・宇都宮大学共同教育学部附属中学校：『宇大附属中研究論集　第73集』，2025.　・宇都宮大学共同教育学部附属中学校：『宇大附属中研究論集　第72集』，2024.

・中央教育審議会：「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」，2021.